

〈史料紹介〉

西岡虎之助・東京帝国大学経済学部

「日本経済史」講義ノート（一九四五年）

海津 一朗・西野 寿紀

解題 二〇世紀日本の歴史学において、西岡虎之助の果たした先駆的役割については、鹿野政直・佐藤和彦・西垣晴次らの指摘がある⁽¹⁾。私もまた、和歌山農村の出自・師範学校での学びが、民衆的視点を保持し、多角的な史料開拓によって観念的な皇国史観との対峙を可能にしたと論じた⁽²⁾。その後、大学講義台本の発見は、教育現場・現実の中の西岡史学の展開、西岡人脈の形成を復元することを可能にした⁽³⁾。今回紹介するのは、敗戦直後の一九四五年一月開講予定の東京帝国大学経済学部「日本経済史」のために準備された講義台本である⁽⁴⁾。全四十四丁からなるこの台本は、「第一 開講の辞（現下の我国情）」に始まり、末尾は「若き世代の人々に対して、望んで止まない」と完結している⁽⁵⁾。

ここでは講義の本論部分に当る二十二丁以後を全文翻刻して、西岡が最高学府の俊英に対して何を託したのか、当時の日本の状況を踏まえた展望について読み解いていきたい。史料の原状は、大小不ぞろいの反古紙を袋とじて右しりぞきを紙送りで結わえた略装である。自らの講義のためのメモ書きであり、反古紙の裏表に細字の万年筆で

書き付けており、全紙にわたり貼紙付箋・抹消挿入・資料添付がある。本来活字になることが想定されていないノートである。⁶⁾

なお翻刻・解題作成に際して所蔵者金丸典子氏の許可を得て、ゼミ生西野寿紀氏の調査協力を得た。(海津一朗)

凡例 先に翻刻した國學院大學(横書き)、大正大學(縦書き)の講義ノートに拠じて、判読不能文字を●、抹消文字を■、見せケチのうち西岡の主義主張に関わるもの「×抹消文」と示し、挿入・訂正や貼紙類は全て「」で示し注記した(原文中の「」はこれと区別するため全て『』とした)。なお一丁半面抹消の類は■「」を省略した。剝離状態の貼紙類は可能な限り原位置に翻刻したが不十分である。本文中の挿入符。や疑問符?はそのまますした。「数字」は原史料の丁数の始まりを示す。用語や固有名詞には差別的なものが散見するが、敗戦直後期の歴史的用語と判断して本文の改変は一切していない。

「1」第一 開講の辞(現下の我国情)

戦争は終わった。それは敗戦といふ形において終わった。小供までが勝つ日までとて、あらゆる実生活上の苦しみを堪へ忍んできたわれら国民にとって、これほど悲しいこと柄はない。しかし敗戦は厳然たる現実の事実である。回避することが不可能である。不可避である限り、正当これを認識して、敗戦によって展開する新事態に対して、われわれ国民は堂々と対処せなければならぬ。

(中略)

「22」苦しい道。それは国土と人口との関係において端的に表はされる。「×三千万」「二千五六百万」の人口を

盛りそれを賄っていけばよかつた明治維新以前の継態にまで縮小された国土のうちに、今度は明治維新以降膨張に膨張をして約二倍の七千五百万となつた。その大人口、敗戦によつて完全に打ちのめされ途方にくれた七千五百万といふ日本人を盛り上げそれを養つて行かねばならないのである。しかも外国からの食料等の実物活資料の輸入が、必ずしも確保せられてはゐないのである。殆ど絶たれてゐるといつて宜しい現状にある。（付箋）現に今その如き未曾有の凶作で、米産額予想は五千万石を割り（四六六一万石）為に上半期中に二千五百万石乃至三千万石といふ膨大な主食を海外から供給されるのでなければ、数百万石の人口が餓死為られるといふ破局状態となり、しかもその外地食糧の輸入は見込薄ときてゐるのである。」かうした事態は、勢ひわが国土内だけで、それらを自給自足するしか道がない。「ことを教てゐる」。たとへ外国から物資を輸入することが許されもしたところで、戦争で極度に荒廢したわが経済、がここ加へて賠償物、賠償金支払「23」の義務を背負つてゐるわが経済、すなはち貧窮の上にも貧窮を求めたわが経済状態を以つてしては、外国資源の輸入は極端な量的制限下に置かるべきは必定である。その限りにおいて自給自足への道は、これを肯定せざるを得ないであらう。而してその道への基本をなすのは農業立国といふことである。農業によつて、少くも食糧だけは確保するといふ（×建前）「原則」である。さりながらそれは生易しい道ではない。わが国は古くから農業国といはれるが、山地が多いため耕地面積は現在でも全国土の僅かに（頭注「？」）一割五分程度（六百万町歩）に貧弱である。イギリスの七割には遠く及ばない勿論のこと、独仏伊等の四割にも相当の農耕がある。この貧弱な耕地面積で以つてし、とも兎にも明治時代の前半期産業革命頃すでに、三四千万の人口の衣食住を養つて来た上に、生糸のごとき輸出品の大寶として外貨獲得の最大の手段である生産さへも挙げて来たのである。そうした一種の弾力性や、その後における人口の漸増・生糸業の躍進的発達等の為に漸く失はれていったのみならず、食糧だけについていへば却つて台湾・朝鮮等の外地並みに外国から年々米だけでも（頭注「？」）二千万石程度を輸入して賄ふといふ状態に立ち至つた。その人口において明治五年の推計では三千四百万人であつて

昭和十五年には内地人口七千三百万人を超えてゐるから、二倍以上の膨張ぶりである。この膨張は、明治維新以降のわが経済実力の増進を反映したものであるが、同時にそれは、軍国主義「24」的思想が因となり果となって作用してきたことも否定し難い。それは人口過剰といふ現象から誘導せられる最も陥り易い解決策であるからである。わが国人口の密度は、昭和十五年当時において一方糶一九一人といふ緻密さであるが、かく人口密度が高くと、これを養ふべき生活資料が均衡を得てゐたならば、そこに人口過剰といふ現象は生じ得ない筈である。然るにわが国は前述の如く耕地か至つて少なく、それがために耕地と人口との割合は一町につき十一人ほど、つまり耕地一町の生産で十一人を賄はなければならないといふやうに窮屈である。たとへ土地生産力の発達は事実であるとしても、国民の生活程度の向上もそれに随伴してゐる限り窮屈は依然として解決せられない。加えて一方では鉄・石炭・石油など近代生活に必要な地下資源もまた貧弱で、それがまた激増する人口を養ふべき産業の発達に対して制約を加へ生活をいよいよ窮屈にする。かかる事情からしてわが国人口は早くから過剰状態に陥つてゐた。(付箋)「ハワイや北米及び南米ブラジル等への移民はその反映であるが至るところ排斥や制限を受けて移民の地位はとかく安定を欠いた。そこでより安定的なる」直接の打開策として、この過剰人口のはけ口を見出さんがために、また間接の打開策として原料資源と商品及び資本の市場とを確保せんがために、武力的領土拡張を理想とする軍国主義が生れて来たのであり、さらにそれを背景として政治経済的な帝国主義的思想も根をはつてきたわけである。「かくして軍国主義思想は昭和年代にはいつて益」々強化せられ、露骨となつて来、そのはては、事変または戦争といふ形態を通して、まづ満州国を出現させて二十年計画の下に百万戸、五百万人の移民を送らんとし、ついで日滿支ブロック経済を樹立し、わが国中心とする関係三国の経済的結束をなし、ついでまた東亞共栄圏を設定して、「滿支・（×）印度」ビルマ・シヤム」・仏印・南印・比島以下南洋諸島より漳州までも含む広域に共栄経済を実現せんとする工作に衆出したのである。そうしてこれらを遂行するに當つて、人口は人的資源として、軍事的には兵力「25」の基盤であり、

経済的には生産力の基盤であるという見地からして、「ここに『産めよ増やせよ』といふ」人口増殖政策がとられ、多産婦は表彰せられさへもして、人口過剰はいよいよ拍車をかけられて来た。事実、十五年以降にも我々百万人餘の人口増加状態が持続せられたのである。然るに敗戦は、（朱挿入線・貼紙）嘗て外国の或学者が、『日本の人口政策を目して、日本人は過剰人口の危険を認めて騒ぐけれども、彼らはその数を自慢し、その光輝ある必要を主張する』と批評した。然れば我国はその光輝ある必要を主張し■してきた軍国主義を没落せしめ「事情を一変せしめた」領土の喪失、生産力の破産、海外からの人口還流などによって事情は一変られた」軍国主義は消滅して、あとには狭小なる国土と膨大な人口とが、その遺産として残されたのである。

その場合に過剰人口が軍国主義を生み出した一原因であるといふ過去の事実から推せば、それが今後においても軍国主義の誘惑を依然残してゐるわけであるが、そうした誘惑に關して敗戦における客觀的情勢とその連合国側の態度は根絶を期してをり、主觀的情勢とそのわれら国民もまた経済的排撃してゐる。軍国主義は最早やこりごりである。してみれば過剰人口に対する残されたる、また過誤のない解決の途はただ平和的手段であるのみである。これは明である。ただしかし目下のところでは、その平和的手段としての対外的面、すなはち国際貿易の振興、平和的移民「X等」「の」促進などは許容せられてゐない。したがって平和的手段によって進む目標はただ対内的な解決策があるのみである。その解決策において基本となるのは、いふまでもなく、人口を積極的に調整することである。合理的な産児制限これをなくしては過剰人口の悩みは端的に解決せられないであらう。がこれは目下の急を救済しない。目下のところ過剰人口は過剰人口として厳然とわれわれの眼前に立ち塞がっているのである。しかもそれはあらゆる意味においてわれわれにとつて、最も大事なここ数年間、その間も依然、過剰人口としてつきまとふて「26」消え失せないのである。その過剰人口の契機を、人口調整以外の方法において継がなれば賄ひ切れないとせられた人口を賄つて、飢えさせず、途方に暮れさせないやうにせなければならぬのである。狭小な国土、貧しい経済、

また膨大な人口、こうした条件下における生活は、常識的にも生活水準を著しき低下を認めざるを得ずそこには少も貧窮な生活の展開として豫想せらるる。ただしわれら日本人の大多数・大衆は、過去において乏しい生活に慣らされてきたといふ歴史性をもつてゐる。それが所謂窮乏生活である。

「中世末期から近世初期にかけて成立した」茶道「によつて代表せられ、またその本質ともせられる、『侘び』『さび』の生活はこの窮乏生活を洗練して美化し、整理して理論付けたものに外ならず。そのことは、茶道における道具・設備などの清潔を汚穢に、簡素を荒堺に還元した場合を想像すれば充分であらう。そうした還元された生活これに社会的混乱によつて齎らされた中世末から近世初にかけての大衆の生活の実状であつたので、こうした物質的窮乏生活をその大衆のうちに「×社会」「生活に疲れて」頹廢した「り、隠遁したりした」文化人としての僧侶・文人・浪人等によつて整頓せられ美化洗練せられ、「精神的內容が盛られ」そうしたものが、当時の大名・富豪「など」豪奢生活者「有閑生活」の興味をそそり取り上げられてここに茶道として成立したのである。利休の身分、利休と豊太閤との關係などはそうした事情を物語るといつてよい。かくて、茶道におけるこの『侘び』『さび』の生活は、「一度は」窮乏生活の發展向上であるといへる。しかしそれは形の上だけのことで、本質的には依然として窮乏生活であることには変りない。そこにあるのは古い消「27」極的な安易性と不生生産的な遊戯性との存在を否定し得ぬ。従つてかかる生活形式を以つて、実生活、現前に構ける窮乏生活の規範とはし得ない。敗戦なりとはいへ、わが国民は依然として実質的には世界の大国である。といふ誇を捨ててゐない。そうした国民の生活は窮乏のうちにも、積極的であり生産的であらねばならない。でなければ一時的な餓死線を突破したとしても、慢性的な餓死道に陥ることとなり、大国たるの活動も喪失するに至るであらう。かくてこれを救済する平和的な国内策として残された途は、国内農業の生産的向上・能率増進に努めることによつて従來の不可能を可能に導く以外になし。従つてそこに展開するのは、さきにややふれた可及的な自給自足状態であるわけである。而してこの基本形態としての

先づ取上げられるのは農業であつて農業立国といふ建前である。大●的に二千万石の増収を見込んで、五か年計画、百五十五万町歩の開墾、百万町の干拓、二百十万町の耕地改良事業既に政策として表れてゐるが、「明治以降七〇年間に開墾された、面積はほぼ百五十万町歩である。それを五か年でやる。」成否は未知数であつてみれば、これの事に依存することは、いふまでもなく不十分であつて、より重要なのは、一般農業経営に対し、不斷に科学技術を導入することによつて労働の生産性を高め、生産力を昂揚し、生産価値の創出を図ることであらう。（付箋「ダムを大規模に建設して豊富低廉なる電力を供給せんとする計画の究局目的はこの源に沿ふものでも一目的はこの農業科学化にある。」而もかうして科学技術の導入は、工業方面に「28」いて一段と重要性を帯びて得ることは、その性質上いふまでもないがさらにこの高度化（高位に上すこと）は、より必要であつて、そうすることによつて乏しい資源の活用、新資源の発見が初めて可能となる。加之それは、遠からず外国貿易が解禁となつた場合における積極的に国富を齎す最上の利器となる筈である。この外国貿易への予想は、高工立国の建前を取り上げしめる。もとよりそこには敗戦国としての背負ふべき諸種の溢路が予想せられたる従来のが輸出貿易品の大宝を構成するのは纖維芸品である。然るに生糸は諸外国におけるレーヨン（人絹）等の目覚しい発達によつて、一時的には兎も角も、永久的には望薄といわざるを得ない。そのレーヨン工業等も、紡績工業なども、掌ては世界水準を抜くものがあり、世界市場を荒しまわつたものではあるが、敗戦後の今後においては、「それだけに」欧米諸国―特に英米等のそれらによる制約が食料市場の両面による制限が厳く作用し、せいぜいが工賃をかせぎ細々と存続するのではないかと想定せられる。然らばかかる溢路をひかへて商工立国は、何を建前とすべきであらうか。それは隘路を伴はない面、制限を受けない面においての進出の途しかない。そうした途は何か。工業的なものか。精密機械であるのか。とも角も諸外国の追隨を許さないもの、我国でのみ生産可能なものを見出す、若くは技術的に他国の追隨を許さないものを製造するかより外途ないのではなからうか。すなはちそうすることが許された後に正当な●の外貨の獲得の途で

あり、国富の増加の途であり、国民の生活●、やがては文化●を向上せしむる道ではあるまいか。今後におけるわが国の「29」外国貿易乃至外貨獲得に当っては軍国主義または帝国主義的背景をもつことは、許されもせず、また欲もしないのみならず、普通なれば正常出費の市場競争さへも、敗戦国として一定の制約の下に置かれねばならないであろうから、勢ひ他国の競争外の、または競争し得ない途を辿るより外途はない。そうした途が、すなはち世界の平和を破らない方法で、自らを生かしぬく。経済的平和主義の実現であるまいか。ただかうした途は消極的ではあるが、それが前提となつてやがては積極化せしめるに至るであろう。すなはちそれを外国もしくは世界の経済的「×平和」を豪も乱さず却つて世界の経済生活をより幸福ならしむる上に、必要なものとなり、これを内にしては輸出貿易の「×増進」「●●●」は獲得外貨の増加となり国富の増進となり、国富の増進は、それを基礎として一般文化の向上となり、それがやがて世界文化の向上、世界人類の幸福に貢献する契機となるからであつて、そこに真の平和主義の実現があると想はれる。真の平和主義、それは武装なき国またはその国民においてのみ、純粹な形において客観性をもつた形において実現し得らる筈である。

わが国はすでに絶対に武装をもたぬ国であり、したがつて戦争をひき起さない国である。これまで軍備のため、また戦争のため振り向けられてゐた費用と知恵と労力、これらの全部が国民の生活を正しく健康に生かす方面に向けるだけでも、すでに明るい明日が現出せられてゐるではないか。軍事費についてみても平時財政の約八割といふ分不相「30」の巨額が費やされており、この負担の為に国民生活の水準は著しく低下を強ひられたので、世界の文明国といはれるほどの国々の知識階級、労働階級の生活と、日本のそれとを比較するならば、そこに雲泥の差のあることが見出される。農民の生活の如きはバルカンの農民のそれよりもひどいとさへいはれる。日本の大衆のかうした悲惨な生活は実に軍備の追究が重大な原因となつてゐる。従つてこの負担を免れることは、「直ちに」国民大衆の生活の向上を意味する。ただ敗戦国である以上今後かなり永い間に亘り賠償の負担に苦しまねばならないであら

うが、その苦しみを経過した後の日本は、軍備・戦争を放任する代償として、文化事業にその全力を集中することが出来るのみならず、(付箋)「すでに。連合国賠償委員会の米のポーレ大使も、『日米は平和と自由主義とによって従来軍国主義下では享受し得えなかつた、より豊かな生活に導かれてゆくと言るのである』、やがてそれが契機となつて、対外的平和主義実現の根底的手段となり得るであらう。

さりながらそれは一つの希望であり理想たるに止まる。われわれはまづ現実の日本を直視し、現実の日本を破局状態に陥れないやう努力すべきである。現状を破局状態に陥れたならば現状も希望も、その根底を失ふからである。現実の日本は如何になさけない状態であるか。領土の喪失等はまだ観念的にしか悲哀となつてわれわれに迫つてこない。天文学的数字に近い巨額の負債もまたそうである。永い間に亘つて奪取られるであらうところの巨大なる賠償、少なくともその一部分は「31」東亜復興とアヂヤ復興のために、支那・比島等に振向けらるるであらふといふ皮肉さをもつ賠償、これもまた直接身近にまだ悲哀として国民は受取らない。外地からの復員人口「七八百万人」の還流後におけるであらうところの、より恐るべき生活難についても同じいことがいへやう。これらはいづれはやがて現実性を帯びて、われわれの面前に現はれ、われわれをひしひしと悲哀のドン底につき落とすであらう。が少なくとも現前には切実に感ぜしむるに至つてゐない。

現前の国民は、あたかも敗戦感なきものの如く浮ついてゐる。迫り来る悲哀・危機をよそにただ運命の顛弄に委ねるが如き態度をとつて、右往左往するのみ。恐るべき事実である。それは、突然の終戦による虚脱状態のさせる業として、解決すべきであらうか。落ちついてわれわれの周囲を見渡すならば、そこには恐るべき危険が、刻々と展開してゐるのである。連合国指令官から三か月の間に三十億円を調達せよと命ぜらるれば、唯々としてこれに差出し、五十台の高級自動車を買せと命ぜらるれば、これまた唯々として、警官が東京中を駆けずり廻つて整えねばならない日本であり、米軍が口にもぐつかせてゐるガムの代を始め、景気よく走り廻る自動車の油代まで、文句を

言はず日本占領費の一部にて支払はねばならない日本である。「×それは賠償が日本占領費ならびに国民の最低必需物資の輸入費を差引いたもの内から行ふといふ原則に伴ふ必然の結果と言ふものの、そうした現状におかれた日本のそこに」(付箋)「米式生活様式は、日本のその二十七倍に当り、従つて日本占領の米軍維持費は、戦争中の日本軍維持費に比較して日本にとり堪へられない程の重荷となるといはれる。そうした日本に」われわれは今現に住んでゐるのである。そのわれわれの身近には日々餓死者が出てゐる。「32」これにもまして身近に展開するのは、恐るべき闇値である。白米一升七〇円、一俵で二八百円といふやうな何とも形容のつけやうのない闇値がわれわれの身近に盛行してゐるのである。そこには夫が南方に出発するに当り残していった四千円といふ金を一年餘の内に疎開先の法外な闇値の農夫達にむしゃぶり取られたそのあげく、村の野荒しを働いたといふ、あはれな妻の姿も見出されるのである。

一般にいつて闇買は戦争中からの現象ではあるが、それは戦争中から国民が、政府のあらゆる計画に、余りに多く騙されて来た結果に外ならない。ことに食料については、国民は最も切実にこれを体験して来たのである。政府の計画は常に齟齬し勝であつたがそれに対して政府は責任を取らうとはせず、国民もこの政府の責任を徹底的に追究したことがないといふ無自覚さであつた。ただしそれには相応の現実があつたので重要な統計類が、機密といふ名のもとに闇黒に閉ざされてゐたこと、また戦争中なるの故に、戦争非協力に陥るおそれがありとして、意識的・無意識的に追究を回避して来たこと等に因るのであるが、そうした態度は、終戦後にも無自覚のまま惰性的に持越されて来たわけである。かくして政府の食料計画に対しては、てんで信用をおかず、「33」その極は闇売買による各人勝手の食糧争奪以外に行きやうのない状態に導いたのである。しかしそれは、心理的には「国民をして」焦燥的状态に陥らしめ、客観的には農民の供出阻害と、中流「市民」生活者以下の生活難「と」なつて、「国民の」危機感を日々に深刻化しつのである。もともと闇売買は、消費者側からいへば、配給が充分でないから勢ひ闇買をせ

ざるを得るのであるが、かつその闇買によって配給がさらに減るといふ、そうした事情から、そこに悪循環を齎らすわけであつて、しかもその循環の環は刻々と狂つてゆき、つひには自分の首を締めつけやうとする。それが現状であつて、その最後は、大量の餓死・混乱・暴動である。

最近国民年の間には、このままでは『何か』起るであろうといふ予感が生じつつある。しかもそれは、民主国家を通過してしまひさうな危険さである『何か』である。（付箋「北海道空知・上川地方で発生した炭鉱地区住民による『集団買出し事件』（十三日に約一千名本月（昭和二〇十一月）十四日に約一千三百名が数十名乃至数百名づつ隊を組んで農村に押しかけ、各●●、農業倉庫、織物工場につづいて食糧を要求したり供出の為運搬中の●●粉を馬車から引下したり、倉庫の明渡しを迫るなどして、公価程度の代価の残して引揚げた（東京朝日昭和二〇、十一、十七）のごときは、その前奏曲の一つの表れでないと誰が保証し得やうか。」「千葉県の方では、農民の種芋を、徒党を組んで刀物まで持出し、取つて行つた。あとで見たら、菰の下に、公定価の札だけおいてあつた。」暗然たらざるを得ない。若しも一部にもせよ社会的混乱、暴動に類することが起れば、一切が破滅である。現在官民の努力しつづける凡ゆる民主国家的改革の試みは、一瞬にして、その基礎から破壊せられ、選挙制度の改革と、教育制度の刷新も、行政機構の革新も、何もかも、一切が吹き飛んでしまふであらう。国民は敗戦に引つづいて、さらに大なる社会的惨禍を味はねばならないであらう。

而してさうした憂へ、社会的混乱、危機をまき越させない為には、国民各個人が「34」自律的自主的なたかつて自治的な精神によつて、国家全体の生活を導いてゆく「用意が」必要があるわけで、そうしたところに、民主主義の本当の姿が見出される。その用意の為の條件は、国民が自主的に組織化することで、具体的「には」労働組合、農民組合など勤労による各層の組合の結成「などが一つの方法であるとせられてゐる。如何にせよ国民自身の力による」組織化される混乱に代るべき新しい秩序が生れ、その秩序によつて「のみ」迫り来る脅威を克服することが

出来るのである。曼然と政府の政治的技術に委せて置くだけで、すまされるほど、敗戦といふ事實は、甘いものではない。手をつかねて右顧左顧(要確認)すべき時ではない。これが解法には、全国民の真剣なる態度が要求せられるのである。

由来日本人には、昔から、長い者には捲かれるといふやふな、弱小民族的事大主義がみなぎっており、捲かれる者が利巧ものであり世渡り上手とせられ、反対に、長いものに捲かれないで、自分の脚で立ってゐる人を馬鹿と見做す風がある。かかる主義による連中が、戦争中に、いかに多く、またいかに虎の威を借る狐主義を發揮して、社会に害毒をいかに多く流したことが。軍国主義をはびこらせ、ひいて敗戦の苦しみを齎らさしめた一半の罪はこうした連中にある。この連中は敗戦の今日にあつても、依然として他人まかせ政府犬のみ主義を放棄せず、ただただ自分からは、「³⁵自分だけを小さく守って、保険金や退職金や、闇取引のアブク銭などで寝転んで遊んでゐるのである。そうした「無自覚な」連中がいかに多いことか。それをそのまま放置してよいものであろうか。飢餓への危機は刻一刻と近づきつつあるのである。

こうしたことは、単に食料解決に関してだけではない。あらゆる物資、労力等に、途方もない闇値が盛行してそこに経済全般に負る悪性インフレーションを展開せしめてゐる。インフレには、単なる高物価を意味するのではなく、通貨騰貴による物価騰貴を意味する。したがつて金廻りがよくなれば、そこにインフレ景気といふ所謂好景気を出現せしめる。戦争中には、膨大な軍事費が、間接に民間に大量にバラまかれるところから、自らインフレ景気を誘ふものであるが、その上に戦争は民需品の軍需品化によつて民需品の強度最層化を伴ふ関係よりして、通貨と物資との関係が、いよいよ齎されてインフレ傾向に拍車をかけることとなる。加え、その間には悪ブローカーの跋扈し立回る余地が充分にあるところからして一貨幣と物資との円滑なる結び付きを阻止することとなり、為にますますインフレを助長してゆき、つひに極端なる通貨と物資との不均衡より生る貨幣価値の下落、物価騰貴となつて、

生業・生活を苦しめるところの悪性インフレを「36」誘ひ出すに至るものである。（付箋）インフレ——通貨流通者、昭和十年を一〇〇とする指数において支那事変後九カ月を経た二〇年八月十五日において二五〇〇の指数を示し、前大戦における独のインフレ破局の七八ヶ月前の指数と同様である。ただし独では戦争中はインフレが起らず、戦後五カ年を経てから破局的インフレを発現したのであるが、我国には戦時中に既にインフレの悪性化の一步手前まで発展しそれが墨進をつづけ、今日にて至つてゐる。」而してこの悪性インフレの犠牲となるのはまづ戦争中の犠牲者である。戦争は、大まかにいって、社会階級をば、戦争利得者（戦争指導者、その便乗者、資本金、敗戦利得者、非被災者）と、戦争犠牲者（欺かれた国民、圧迫されて来た自由主義者、復員兵士、徴用者・外地及び旧領土よりの帰還者、被災者）とに分けた。戦争利得者は、戦争中の社会において、常に胡麻化しに成功して来たのであるが、終戦後においても、戦争中におけるが如く、また胡麻化しによつて飢餓より免がれ、これに反して、あらゆる戦争の犠牲者が再び戦後の犠牲者となり、飢餓線を辿らふとしてゐる。悪性インフレは刻一刻とそうした状態に追い込みつつある。果してそれでよいものであらうか。社会正義はそれを許すであらうか。許されないとすれば国民の危機に対する明確な認識と自覚とを欠いてゐるだけに、そこには社会の混乱化と暴動化との過程が大きく開かれてゐるわけである。大勢はそこになだれ込むであろうことは必定である。亡国状態は「かくして」ここに現出する。恐るべきこと柄である。

敗戦はしかし乍ら亡国を意味しない。この亡国より救ふの道は「×国民が民主的に組織化せらるること前述の通りであるが」「37」「結局において国民の」道徳的教養を以て外ないであらう。これを欠くところには、政治も無力であり法律もまた無力である。政治・法律を有効ならしむる為の政府側または「×指導者」「上に立つ者」側における背景は、兵力・警察力などによる強制であるが、兵力は全面的武装解除によつて皆無であり、警察力また一定の制限を受けてをり、さらに進駐外国軍は、かかる混乱・暴動に傍観者でしかない限り、こうした強制の薄弱なる

はいふまでもないのみにならず、そうした強制は本質的に、特に民主主義・自由主義への解放が叫ばれ、また約束せられもしてゐるにおいては、好ましくないものであつてみれば、残るのは、ただ国民側における背景としての道徳的教養あるのみである。亡国を救ふ根底はただ国民各自の道徳的教養あるのみである。もとよりそれは知的教養・文化的教養の裏付けを必要とすることはいふまでもない。(付箋)「知的教養は国民の組織化を可能たらしむるであらう。だがその組織の細胞たる国民各人の道徳的教養が低劣であるならば、それは組織の細胞を腐らしめ、ひいては組織そのものも腐敗するに至るであらう。」

そうした道徳的教養、これをわれわれ国民はどの程度に持合せてゐるのであろうか。配給の甘藷の分配をめぐつて、兄弟といふ肉親間に殺害事件を引き起したとも伝へられてゐる。掏摸・強盗・窃盗・殺人、刃傷沙汰・喧嘩では不良少年。「自由主義をはきちがえた」少女の跋扈などの闇黒面が、刻々と社会の前面に、大きく押し出されてゐるとも新聞〔38〕は報道してゐる。大阪検事「局」の、巧妙極まる脱法手段による非社会正義的な砂糖処分もある。静岡県・某女学校校長の終戦を好機としての保管軍需品の横領・横流しもある。そのほか、「あとで確認 公然たる不正で」配給係員「のインチキな」ど計へ切れないものがある。とくにすさまじきものに、復員軍人の場合であらう。軍需品といふ易々しく仰々しい名の下に、戦争中いかにあらゆる種類の膨大な物資が、国民の特性において、かき集められ隠匿されて来たことか。その軍需品が、敗戦を機会に不当不法処分されたのである。敗戦、それは日本の歴史ありて以来、かつてなかった悲しい苛烈な敗戦である。その敗戦すら利用して、軍人のうちには物資をしたたかかへ込んだ連中があるのである。同胞の飢餓を傍観しつつ『負け肥り』したのである。かつて彼等が自讃したところの『比類なき戦友愛』は、かくして酒樽と共に消え失せ、米俵とともに逃げ去つたのである。そこには米俵二十俵を住宅へ運んだ陸軍大佐がある。百万円の製材機具を不当に関係会社へ払下げた同く陸軍大佐とある。四十万円の船具を貨車二台で千葉県へ輸送した陸軍少尉がある。時価数十万円円の自動車タイヤを、朝鮮人

と共謀して持出した海軍少尉がある。晒木綿二千二百反——戦災者でなくとも唾棄睡涎するところの木綿の大量を窃み出した海軍兵曹がある。こ「うした軍人の悪態」は一般の常識となつてゐる。そうした常識は、いかに終戦後の農民の食糧供出をしづらせ、いかに市民の「39」憤激をそそりつつあることが、かかる軍人の悪むべき行為、きたなき心情それは崩壊期の混乱に伴ふ人間の弱点の暴露とのみいふだけですまされる程度のものであらうか否か。

（はぐれ付箋）「私のゐる田舎の寺には、わずか二つあって、各地百名内外の児童が收容されてゐるが、暗に教員がてら境内を訪れて、心を打たれるのは児童の顔色が蒼白さを通り越し、黄色く萎びてしまつてゐることである。これは正しく飢死の一步手前の相線だ。ところが児童につき添つてゐる教員や寮母達の顔色は必ずしも苗色になつてゐず、人によつて却つて健康に充実しているものさへある。私はみだりに、教員が配給を施しているといふ小村の噂話を信ずるものではないが、よりとて一筋に栄養学上の問題であるとのみ思つていたのではないのだ。学童は逐次、親の手に帰されて居り、新聞は丸々に肥えたつて帰る子のことを報じてゐても、それは百人に一人あるなしの特別に過ぎないのである。（文芸春秋昭和二〇年十一月号阿部慎之助『道徳の封建色』）」

われらはさらに視野を広げる。終戦と同時に『暴は報ゆるに直きを以つてし、讐に応ゆるに恩を以つてす』と所謂『恩讐の彼方』以上の実に大度を示した中国が、俄かに態度をかへて、戦争犯罪人として天皇以下三百人餘も指名して来たとは何せらるるについては、わが政府、政治家の道徳観の低劣さが原因として指摘せられるともいふ。乞食でない限り、往来で知らぬ他人にタバコやチョコレートをねだつたり貰つたりはしないと云ふ中国の日常道徳にくらべて、わが現状は如何。その道徳性は大人と子供ほどの差異がありと新聞はのべてゐる。（付箋）「小供的な道徳性としては最近におけるマックアーサーに言い付ける主義のごときもそれで、中には大学教授復職にもこの手が使はれたとも伝へられてゐる。反民主主義的な情けない道徳性といふべきであらう」

人間は悪である。それは人間が動物であるからである。けれども人間は社会を形作る。それゆゑに人間は善なら

んことを要求せられる。それが道徳である。この道徳の最高度に行はれる社会は観念的にはあるが、神の社会である。社会の進歩とは、この神の世界に近づきつつある状態を指すのである。神と動物と二つが同居してゐるのがわれら人間である。人間「40」には、神ならんとする面と、動物ならんとする面がある。この二つの面の比重の如何によつて、その人、その国民、したがつてその社会、その国家の道徳的評価が下される。今われわれの面前に推し出されつつある闇黒面は、それが単なる戦争中のあらゆる表現の表面化したもの、道徳面での表れであるといふごとく、一時的のものとして聞き流し見のがしてよいものであらうか。突然の、敗戦といふ悲しさから導かれた自失状態、外部からの力によつて強圧から解散されたによる虚脱状態に原因する瞬間的な心の迷のなせる業とのみ見ることが出来るであらうか。戦争中、道義国家とか道義外交とか声高に叫び立てて、外地にまで押し売りを、これ事とし「てき」た日本、日本人ではなかつたのか。わが国民に昔から模倣が上手であるといはれてゐる。そうしたことが道徳方面にも作用してか、厳めしい道徳の名を夥しく「並べ」、やかましく云々するが、その道徳の実を身につけ実践することは至つて、少なく稀であるのではあるまいか。したがつて、一旦「民主国家のもとに」現実が暴露すれば、そこには不徳・悪徳・至らざるなしといふ状態が展開するのではあるまいか。「過去は問はず将来それによいのであらうか。」

「41」敗戦が與へる杯は、苦くとも永く飲みつづけねばならないわれわれ国民である。敗戦によつて齎され絶望観は、今後における生活状態の悪化、(付箋)すでにポーン大使ののべた賠償政策において、日本には日本が侵略した国々の生活条件より高くない水準において経済生活を再建せしむる。つまり従來の『東亜共栄圏』といふ合衆等の実質的租界をなしてゐた。『東亜共栄圏』の一環であること以上を許されないか、それ以下である必要性もないといふような経済生活の悪化、とくに粗食による肉体的貧困ならびに生活程度度引下げによる道徳的意識の低下などと相まって、刹那的享樂の追求に沈溺する頹廢思想、自棄的感情のままに任せる虚無思想―その極は無政府主義の形

をとる虚無思想への温床ともならないとも限らない。（付箋）すでに国民大衆の間には『正直にやってゐくは間尺にあはぬ』として詐欺的の生活感覚に生きんとする傾向が広まってゐるといはれる。町々には復員兵や失業者によって、掠奪が横行しつつあるとも伝へられてゐるのはこうした頹廢感・虚無感の萌しではあるまいか。」これに加ふるに外部的には国際状態の成行によつては、わが国はあたかも欧州におけるベルギー、オランダ如き地位に置かれ、自分の意志によるのではなしに、外国の恣意によつて国土が「戦争が捲き込まれ」蹂躪せらるるといふ悲惨な境遇に引きずり込まれないとも限らない。敗戦国の悲しみは、ここに思出される。戦争は勝つべきである。だが戦争は未来・永劫に亘り、なすべきではない。戦争と敗戦、この二重の原因による鉄棒を、われわれは「42」未来へ背負つて歩まねばならない。それが戦をし、戦に敗れたわれわれの運命である。その道は永い。その過程にはわれわれが、目を瞑り耳を塞がねばならないドギツイ事件の数々に出くはすであらう。天に泣き叫び、地に泣き入らねばならないムゴい事件の数々に遭遇するであらう。（挿入線・欠損）思へば思へば、永くまた峻しい道である。背負いきれぬ苦難をば、しかしながら背負つてすまねばならない道である。永い道である。

しかしわれわれは、どこまでも遅しく前進して生き抜かなければならない。停滞・後退は、人も国も発展に引込むのみである。三千年の歴史はそれを許さない。ただひた向きな前進、そこには、自らの汗を流して働き抜くことと、及び自らの知恵囊を絞りつくして工夫努力すること、これ以外に滅亡の危機を克服する途がない。戦争は労働に従事しない者にも労働を強いた。知識階級といふ者にも壕を掘らせた。有閑夫人といふ者をも買出しに走らせた。この労働を習慣として明日に持越「43」すとともに合理化し組織化した頭脳の働きをもつのが新しい国民」としての日本人の姿であらねばならない。頭脳を欠いた生活意識は人を「して」その自らの力と自らの理性とから遊離せしめて無軌道・無定見、いたづらに虚栄に駆り立てるでなく、独尊的かつ無計画的指導によつて生活を破滅さす悲劇に陥らしむるものである。「島国的な」野郎自大といふ国民的性格が如何に国を毒し、国を過つて来たことか。

〔付箋〕。中国の技術評論家高玉樹はいつてゐる。『八月十五日の歴史的な放送を知人の日本人宅で聞いた私は我等（中国人）と諸君（日本人）との前途にとって実に暗澹たるものを示唆する片言を耳に挟んだ。諸君の中の無思慮な一女性は、チャンコロまで来るのか、と言って慟哭した。借問す、諸君の中の幾人が、この片言によって窺はれる優越感を払拭し去ったであらうか』とて、日本大衆の中国に対する独尊的態度を払い難し、謙虚心を失つてゐることを指摘している。』

「独尊に対するものは謙虚である。それは道徳的教養と並列関係にある。この道徳性に裏付けられた謙虚、それを我も人も身に付けることによつて、そこに本当の民主主義と現はれるのであろうし、自由主義も生れるであらうし、平和主義も栄えるであらうところの謙虚、これを心の燈（ともし）火として悪戦苦闘八カ年にしてつかみ得た道、それは峻しく苦しい道ではあるが、その道を、臆せずたゆまず、歩みつづけ「ねばならない。」そして歩み抜くことによつて、これまで、多少のウソ・イツワリはあつたにもせよ、ともかくも、幼いころから「44」最も優なる国体をもつ日本、最も恵まれた自然を持つ日本、最も美しい人情をもつ日本として教へられもすれば、信じ切つて来たこの日本、われわれにとつて、かけがえのない祖国」として限りなき愛着をもつこの「日本を夢としてではなく、現つとして、世界に「大きく」浮びあがらせねばならない。希つて止まない。とくに若き世代の人々に対して、望んで止まない。」

注記・貼紙資料

〔22〕貼付け資料 県別5年間作付面積・買収高（日本産業経済昭和20・11・7）

〔24〕 貼付け資料 社説「産児制限を合法化せよ」

天声人語的コラム「近世石高」

〔29〕 貼付け付箋 長文下段「。連合国最高司令官：」箇条書き3つ、補足メモにつき略す

〔32〕 貼付け新聞 青鉛筆「野荒らしを捕へたぞ」

データ「おそるべき闇値」

〔37〕 はぐれ附箋のうち 戦中戦後の悪性インフレについての具体的記述1枚

解題・註

〔1〕 鹿野政直「西岡虎之助 民衆史家の風貌」（『鹿野政直思想史論集』7、岩波書店1970）、佐藤和彦「西岡虎之助」（『日本の歴史家』日本評論社1976）、西垣晴次「西岡虎之助1895-1970」（『二〇世紀の歴史家たち』5、刀水書房2006）

〔2〕 海津一郎「西岡虎之助コレクションの全体像についての覚書」（『和歌山地方史研究』60、2011）、海津一郎・吉村輝旭編『西岡虎之助 民衆史学の旅立ち』和歌山大学日本史研究室2015。一方海津のような理解に対して批判的立場の見解もある。小原淳

「一九二六年の西岡虎之助と平泉澄」（『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』34、2013）。これらの研究は、海津一郎編『西岡虎之助神話 故郷と絵図 二〇一六』科研報告書・課題番号35370773、和歌山大学海津研究室刊行2017に再録した。

〔3〕 小林真侑「西岡虎之助『講義録』にみる一九三八年の西岡史学」（『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』41、2020）、同「未発表の西岡虎之助『講義録』全文紹介」（『学芸』67、2021）、海津一郎「西岡虎之助講義『国史学』にみる戦中戦後の国学院大学人脈」（『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』42、2021）

〔4〕 もっとも重要な点はこの講義ノートが実際に使用されたか、西岡の講義が開講したかであろう。日本経済史の主担当土屋喬雄が公

職追放されており、一〇月開講が一月に延期されたことは校史で確認される。受講学年の名簿も残っており、追跡調査が可能である。だが、もし未使用（休開講）であったとしても本講義案の学術的価値が損なわれるわけではなからう。

(5) 時代的に先行した大正大学「日本経済史」講義録（一九二八年推定）、國學院大學「日本文化史上代」講義録（一九三八―四一年）は、末尾部分が未完成になっており、講義としての全体像が不明である。これは通常の大学講義が、冒頭・初年次で枠組みが定まれば後は流れに任せる大学教師の生熟、という一般的な理解で処しておきたい。今回の「現下の我国情」は並々ならない決意で準備された単発講義（あるいは特別講義）だったと推断される。

(6) 敗戦後知識人の発言を点検したが、一九四五年一〇月段階のものは非常に限られている。しかもこのように経済学・経済史視点から「現下の我国情」全体を展望した仕事は皆無ではないか。その意味で、本ノートは一歴史学者の問題提起を越えて、敗戦後の知識人論を再検討する手掛かりになるかと思う。なお、西岡講義の前段の部分（敗戦の要因、日本型ファシズムの在り方、とくに封建遺制理解）については、『和歌山大学教育学部紀要』人文科学73、2023年報に掲載予定である。

本稿は、日本学術振興会助成金（基盤研究C課題番号21K00870）の成果である。